



COUNTER METRICS

リリース5.1

リリース5・1変 更点

フレンドリーガイド

この冊子は、**COUNTER**リリース**5.1**実務指針をわかりやすく説明した「フレンドリーガイド」シリーズの一部です

全シリーズは当社のウェブサイトの教育ページで無料でご覧いただけます
countermetrics.org.

このシリーズは、わかりやすい日本語で書かれています。COUNTER実務指針の中の文字列は、正確にはアンダースコアを用いてつながれて表記されます。たとえば、Data Typeは正確にはData_Type、Total Item Investigationsは正式にはTotal_Item_Investigationsと表記されますので、ご注意ください。

この冊子で説明されるもの

この冊子で説明されるもの.....	2
概要.....	3
レポート単位としてのアイテム.....	3
本のメトリック（指標）.....	3
セクション・タイプ.....	4
データ・タイプの拡大.....	4
アクセス・タイプの定義の明確化.....	5
レポートのヘッダー.....	6
COUNTER API と JSON 変更点.....	7
COUNTER API (sushi).....	7
JSON.....	7
小さな変更点.....	7

概要

新しい実務指針は、前回のリリースと比べて大きな変わりはありません。プラットフォームレポート、データベースレポート、タイトルレポート、アイテムレポートは、以前と変わりなく、またその派生品であるスタンダード・ビューも同じです。Investigations, Requests, Searches, Denials などのメトリックも、全く変わりありません

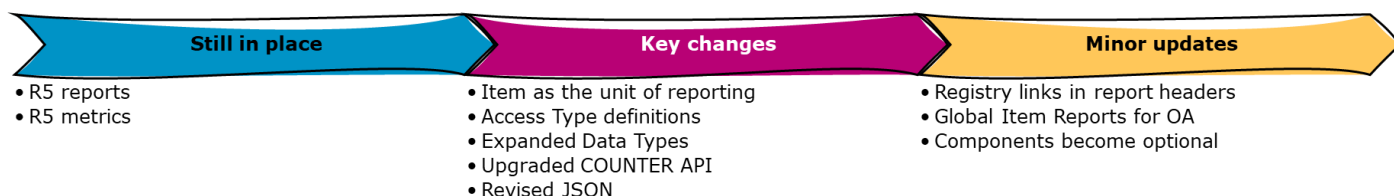


図1 COUNTER 実践規範のリリース5 とリリース5.1 の間の見出しの変更。

ただ、主な変更点は、アイテムをレポート単位としてより一貫して重視すること、アクセスタイプの定義の改善、データタイプのリストの拡張、およびSUSHIプロトコルとそれに関連したJSONレポート構造の重要なアップグレードです。変更点の多くは、COUNTERのAttributesに影響を与えるため、「COUNTERのAttributes, Elements, そのほかの用語について」もぜひご参照ください。

レポート単位としてのアイテム

OA（オープンアクセス）レポートの改善は、リリース5.1の目玉であり、これからはアイテムレベルでのレポートが必須となります。しかしながら、多くのタイプはこの影響を受けないので、雑誌、データベース、マルチメディアなどのタイプは以前のレポートの形式と変わりません。ただ、本の中には、メトリックにおいて影響を受けるものがあり、レファレンスもの（百科事典など）は、この影響を受けることとなります。

本のメトリック（指標）

本の使用状況は、アイテムとタイトル両方のメトリックで報告されます。タイトルのメトリックにおいては、今回のアイテムレベル報告への移行の影響はありませんが、アイテムレベルのメトリックには影響があります。

本をチャプター（章）ごとに提供する出版社の例を取ってみてみましょう。ユーザーはこの出版社の提供するある本の全章10チャプターをダウンロードしたとします。以前のリリース5では、このチャプターレベルでの使用を報告する仕組みがありませんでしたが、今回からはチャプターレベルでの使用がご覧いただけます。タ

イトルレベルでの使用報告も引き続きご覧いただけますので、本の使用が水増しされて見える心配もありません。下記の表をご覧ください。

	Books, R5	Books, R5.1	Journals, R5	Journals, R5.1
Total Item Investigations	1	10	10	10
Unique Item Investigations	1	10	10	10
Total Item Requests	1	10	10	10
Unique Item Requests	1	10	10	10
Unique Title Investigations	1	1		
Unique Title Requests	1	1		

セクション・タイプ

今回のアイテムレベル報告への移行によって必然になったのが、セクション・タイプの廃止です。セクション・タイプは今までデータ・タイプと対をなして使われ、例えば本の使用報告なら、データ・タイプ＝「本」、セクション・タイプ＝「チャプター」などのように細分化された報告がされてきました。同じく、アイテム・レポートも今まで親データのコンセプトが存在し、3層の細分化が行われてきました。

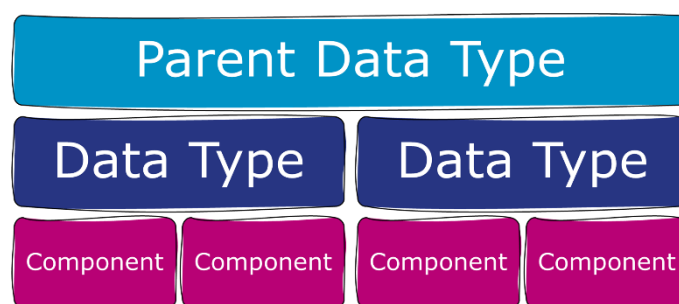


図2. データ型の仕組み - または、R5.1 ではセクション型が必要ない理由。

しかしながら、今回からはデータ・タイプの細分化は直接報告されるので（例えばデータ・タイプなら「ブック・セグメント（本の一部）」など）、セクションタイプは廃止となりました。

データ・タイプの拡大

リリース5.1より、データ・タイプは拡大され、またCOUNTERの4大レポートの中核をなすものと位置づけられ、その定義もより明確になりました。出版社はより細分化した使用報告を作成しやすくなり、図書館も出版社間の使用報告を時系列で比べたりがしやすくなります。

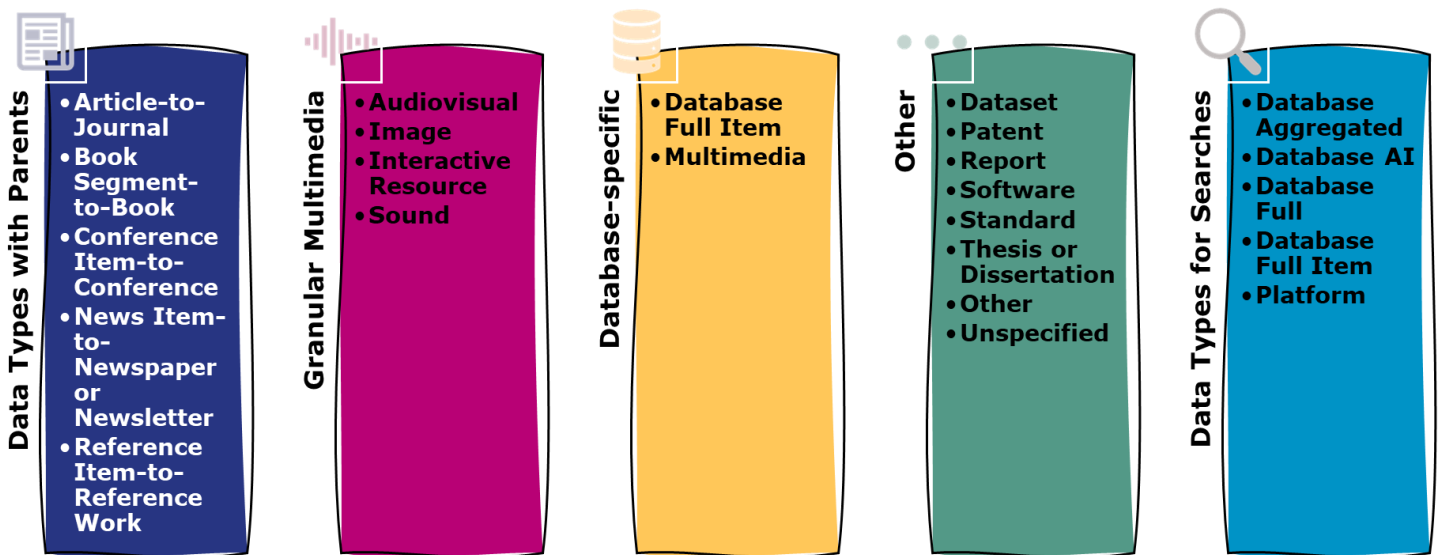


図3. リリース5.1のデータ型

データ・タイプ拡大に伴い、COUNTERレポートのスタンダード・ビューに報告されるものにも変更が加えられました。例えば、「会議録」(Conference)という新しいデータ・タイプを使い始めた出版社は、JR_1のスタンダード・ビューに会議録の使用報告をすることはなくなります。このせいで不具合が生じる場合、スタンダード・ビューのかわりに、タイトル・レポートが使用できます。タイトル・レポートでは、データ・タイプを使ってデータを自由にフィルターすることができます。

アクセス・タイプの定義の明確化

以前の実務指針では、アクセス・タイプがどこで使われるのかが明確化されておられませんでした。リリース5.1では、以下の原則が定められました：

- COUNTERレポートにおけるアクセス・タイプとは、レポート作成のもととなるプラットフォームのみに関して適応されます。すなわち、OA（オープン・アクセス）の本が、定期購読者のみアクセス可能のデータベースにおいて提供された場合、それはControlled（コントロール）として扱われます。
- 使用報告書内の出版物1つにたいして、1つのアクセス・タイプのみが使用可能です。例えば、雑誌に掲載された1論文に、たとえそのメタデータも無料で掲載されていたとしても、全テキストは定期購読者のみ使用可能だった場合、それはControlled（コントロール）として扱われます。

また、以前のアクセス・タイプの定義は少しわかりづらく、ControlledとOA Goldの2つしか一般に使用されませんでした。リリース5.1では、ビジネス・モデルや

、OAライセンスの種類を使ってOAの定義をするということのを避けるべきであること、また、出版社側が無料提供した出版物を報告すべきであるということもかんがみる必要がありました。これらを考慮するための長い議論、そして皆様からのご意見を考慮した結果、以下のアクセス・タイプを定義いたしました：

- **Controlled.** コントロールされたもの)。正規ユーザー（定期購読者や正規登録者など）のみに利用可能な出版物。
- **Open.** オープン) 出版社がOAとした出版物。たとえどんなライセンスを振り当てられているにせよ、またたとえControlledとして以前出版されたことがあるにせよ（エンバーゴ期間中だったものなど）、出版社がOAにしたもの。
- **Free To Read.** 自由に読めるもの)。期間限定で誰でも自由に読めるもの。（初期コロナ下でのコロナウイルスに関する論文など）

ここで一番重要な影響点となるのは、タイトル・レポートにおけるTR_B1 とTR_J1のスタンダード・ビューです。従来これらのスタンダード・ビューはOAのチャプター（章）やアーティクル（記事）を除外してきました。今回からは、TR_B1 とTR_J1は雑誌・本双方のFree to Read（自由に読めるもの）も除外します。このせいで不具合が生じる場合、スタンダード・ビューの代わりに、タイトル・レポートを使うことができます。タイトル・レポートでは、アクセス・タイプを使ってデータを自由にフィルターすることができます。

2番目に重要な影響点となるのは、今回のアクセスタイプの原則と「オープン」の定義により、（「ブロンズOA」と呼ばれることもある）無料出版物を提供してきた出版社は、今までのようにこれらを「Controlled」と報告するのではなく、今回から「オープン」として報告することができるようになります。

レポートのヘッダー

図書館員の方々より「カウンターレポートが、はたしてCOUNTER準拠の正式なレポートなのか、ただそれっぽいだけの準拠していないレポートなのかどうか、わかりづらい」という指摘がありました。そのためリリース5.1より、自社のCOUNTER Registryへのリンクをレポート内に含めるようにと出版社は提示を受けています。COUNTER Registryは、COUNTER準拠するすべてのプラットフォームの詳細を提供しています。詳しくはregistry.projectcounter.orgをご覧ください。

COUNTER API と JSON 変更点

COUNTER API (sushi)

一番の変更点は、リリース 5.1 より、リリースのナンバーがURLに加えられていることです (<https://usage.reporting/sushi/r51>)。

また、IPベースの認証を廃止し、SUSHIをより堅牢なものにすることにしました。出版社は、代替手段としてAPIキー認証を実装することを選択できます

APIエンドポイントにもいくつかの変更があります。変更は以下です：

- /status は一般公開となるので、誰でも特定のサービスが稼働しているかどうかを簡単に確認できます。
- /reports は利用可能なデータの最初の月と最後の月に関する情報を表示することができるようになります。
- COUNTERレポートの一般的な拡張をカバーするために、新しいパラメータが導入されます。Lastly, there are some changes to the API endpoints:

JSON

R5.1のJSONスキーマはOpenAPI 3.1を使用しており、旧スキーマよりもコンパクトになっているため、ファイルの生成、検証、利用が容易になりました。これにより、アイテムや親メタデータの重複を回避する、Performanceの構造を簡素化する、値リストを簡素化するなどの変更が行われました。また、JSONレポートにのみ現れるいくつかの余分なフィールドを削除いたしましたので、JSONと表形式のレポートが一致するようになっており、フォーマットの違うレポート間の比較が容易になりました。

小さな変更点

以下に上げるものは利用者の日々の仕事に大きな影響があるわけではないものの、指摘しておきたい変更点です。

- アイテムレポートの一部であるコンポーネントは、今後よりオプションとなります。これは今後、より多くの出版社にアイテムレポートを提供させるためです。
- 今回から出版社にグローバルアイテムレポートの提供を推奨しています。これに関しては、「COUNTERとオープンアクセスに関するフレンドリーガイド」に詳細が記載されています。

より詳しい情報について

より詳しい情報については、Code of Practice (<https://cop5.countermetrics.org/en/5.1.0.1/>) と COUNTER (countermetrics.org).

答えがどこにも見当たらないご質問がある場合は、当社のプロジェクト・ディレクターの下記のメールアドレスにご一報ください。 tasha@countermetrics.org



COUNTER METRICS

スポンサーの皆様ありがとうございます。このガイドは以下の言語で利用可能となる見込みです。

Chinese

スポンサ SpringerNature

SPRINGER NATURE

French

翻訳 Couperin Consortium and the Canadian Research Knowledge Network

German

スポンサ Thieme



Japanese

翻訳 Yuimi Hlasten, Denison College

Spanish

スポンサ Gale

